

中
勘
助

天
の
橋
立



天
の
橋
立

君とわれ昔と今にゆきかよふ天の橋立なかたえにけ
り
粟^{あわ}
穂^ほ

昭和三十四年四月二十一日

朝。旅疲れや病後の疲れ、それに輪をかけた力落しの
ため私は毎朝目をさますとそのままいつまでも床の中に
仰向いている。今日もそうだ。そこへ九時頃だったか、
私にはきこえないが電話らしく、家内が隣の茶の間へ立

っていった。と、興奮してあたふたと 少々お待ちください 筆記しますから といいおいてこちらにある自分の机へ紙と鉛筆をとり小走りをしてきた。紙も鉛筆も電話のそばにあるはずだが と思いながら私は黙っていた。家内はまた電話にかかって筆記してる様子。言づけば電報らしい。すんで枕元へくるや 黒川節子さんがゆうべ一時に亡くなった といった。きくと同時に私は溜息みたいな嘆声を出した。衝撃だった。落胆だった。今度はじめて宮津に節子さんを訪ね、何十年ぶりで逢ってからは毎日節子さんの話、それは記憶に残ってた節子さん

とは別人のように銷衰しょうすいしたことであり、それを見て私はすっかり気落ちしてしまったという隠さぬ嘆きであった。八十をこした年と、まだよくなりきらない大病の後であることを思えばむしろ当然なことだけれども、その当然をこえて私のうけた打撃はひどかった。

帰るときに節子さんは力なく上り端あがまで見送って 淋さびしゅうございます とはつきりいった。土間に立った私は上体を屈かがめて顔を近づけながら またおめにかかりましょう と心をこめていった、節子さんを、同時に自分を慰めるように。これは気休めではない。お孫さんの学

校の都合から京都へ出られることになって家さがしも始まってるのだ。そうなれば来春の京都旅行には存分に訪問して昔語りふけに耽ることができ。前日の夕刻着いて翌日の午後別れるのではこまごまと思ひ出を語るどころまではないかなかった。世間話のきれめに昔が顔を出すぐらいのことで。

家内は電報の言葉をつたえて涙を一杯ためた。節子さんは別れるのがいかにも淋しそうだった。そういうことをまっすぐにいう人だった。明朗豁達かつたつで男性的なところがありながらやさしい感情を豊ゆたかに持っていた。

こちらから出した礼状に対する返事が四月十七日附になっっている。それから五日めに亡くなったのだ。

御二方様からのお手紙あり難く拝見致しました。この度は本当によくこそよくこそお訪ね頂きました。嬉しさは筆や言葉には尽せません。重ねて厚く御礼申し上げます。何十年来の宿望が叶いましてさて何からお話申上げてよろしいやら唯感激に満ちてお話も後や先になりました。せめて今一日御滞在頂きましたら少しは落ちついてお話も出来ましたでしょうにあまりにも短い

御滞在で誠に誠にお名残り惜しゅう存じ上げました。

宮津はお初めてとの事で御座いましたのに名におう橋立にさえ御案内も出来ませず申訳ない事と存じています。お許し下さいませ。御予定通り十二日御無事御帰京遊ばされました由金閣寺の静かさと異り一しお賑にぎやかに思召おぼしめされる事と存上ぞんじあげます。

奥様にはお初にお目に懸りましたのに少しもお初めなにとぞあての様な気も致しませず失礼斗ばかり致しました段何卒悪なにとぞあしからずお許し下さいませ。また来年の御目もじを今ちよつとから楽しんでおります。一昨十五日京都に一寸ちよつと適當の

家があります由通知を受けましたので□子上洛しまして昨日帰宅致しましたが竜安寺の近くの私の実家□□の近くでよさそうに御座いますからならばそこにきめたいとも思いますが一応男の子たちとも相談致さればなりませんのでまだ決定と申す処には参りません。しかし早晩移転は致しようからこの秋は京都でお目にかかれる事かとも存じています。どうぞその節はしずかに^{ほうき}箒を立てるまでゆっくり御来訪頂きたいと今から期待しています。

まだ種々申上たき事も御座いますか……今日はこれ

で失礼致します。いづれまた後便ゆるゆる御伺い申上
たく存じています。何卒何卒お二方様ともくれぐれも
御身御大切に遊ばして下さいませ。×子△△子からも
よろしく申上ますよう申出ました。

□□□子様お驚きの御様子目に見えるよう御座い
ました。ではいづれまた。かしこ

四月十七日

節子

中^{なか}御二方様 御前に

末ながら御令妹様方にもよろしく御□声お願い申
上ます。乱文拙筆御判読願^{ねがいあげ}上ます。

私は去年の京都旅行にも宮津を忘れはしなかつたけれども出発前の肺炎で予定が遅れ、体も恢復かいふくしなかつたので行くことができず、その言訳を節子さんに出した。今年
は東京を三月二十四日にたつて四月九日に帰京、そのあ
いだに宮津へ行つて先方の様子によつては何泊かしても
いいつもりだった。それが東京出発間際の歯の病氣、時
間がないため応急の手当をして出かけたのが悪化して骨こつ
膜膿瘍まくのうよう、治療、切開、抜歯、夜昼なしに氷囊ひようのうをあてて
床に就いてる始末で、どうにか全快したのが四月八日、

食事も思うようにならず、酒も入浴もそれまで禁じられていた。余儀なく留守宅の都合のぎりぎり、十二日帰京ときめた。そのあいだに今度こそと思つて節子さんのほうをきいてやった。それに対する×××子さん——節子さんの長女、未亡人となつて節子さんの世話をしている——からの返事。

昨日は御芳書を拝受家内一同で大喜び致しました。一兩年母が楽しんでおりました事がいよいよ実現するかもしれないので私共もこんな嬉しいことはござい

ません。どうぞおじ様方の御都合のおよろしい時にいつでもお出で下さいませ。汽車は京都発十一時宮津着十四時二十三分がディーゼルカーで乗替えなしでございませ。京都市内からよろしいかと存じます。京都発午後四時の準急白兔はくとは短時間で一ばんよろしゅうございませが二度もおのりかえがございませ。その他にも直通列車が二、三本ございませ。御都合のいい時間に遊ばして下さいませ。一寸御参考までに申上げました。古い家の手入もろくろく致しませぬわび住いでお気持よくお過し頂けますかと心配でございませがその点あしから

ず御了承下さいませ。では一日も早くお目もじ出来ますようおしらせおまち申上げます。一ふでお返事のみ。母よりもよろしくよろしく申しております。

かしこ

三月二十七日

×××子

私たちが宮津へたったあとへ行違いにきてた節子さんの便り。

今日こそは今日こそはとお便りお待ち申上っております

したがきようも空しく暮れてしまいました。如何遊ば
しましたかとお噂しておる事で御座います。和子様御
齒の具合は如何でいらつしやいますか。——註。私と
家内をとり違えてるのだ。——この間はおはがき頂き
まして有難う御座いました。お心におかけ下さいまし
て御心入れの数々の佃煮つくだにお贈り頂き御芳志誠にあり難
く早速拝味致しております。早速御礼状さし出すはず
で御座いましたが直ぐ御目に懸られます事と存じその
節にと失礼しておりました。何とぞお許し下さいませ。
明日は必ず御越し下さるでしょうと一同おまち申上げ

ております。私は元来の不精者近頃は一層老耄致しま
ろうもう
 してどちらにも失礼斗ばかり申上げております。この度は
 数年来の希望が叶いましてお懐しい御目にかかれます
 事誠に夢のようにお嬉しく数々の思い出に耽っており
 ます。宅は……いぶせき伏屋に老いさらばいたる老婆
 を御想像下さいましてお驚きにならないようお願い
 申上て置きます。お構いは出来ませんが何卒御ゆるり
 と遊して下さいませ。かしこ

四月七日

黒川節子

中勘助様 御内

九日宮津行と予定を改めてたのを予感とでもいうのか八日の午前治療が終って全快となるや寓居へは帰らずそのままタクシーを飛ばして京都駅へ、教えられた十一時の列車にうまく間に合った。私としては前例のないあわただしい仕方だった。

すっかり曇って小雨がばらつく。恵まれた天気ではないけれどほんとに久びさに逢いにゆくのだし、先方の切な希望にそえる喜びもあって途中の天気なんぞ念頭にない。

昭和三十二年五月十一日附節子さんの手紙。東京中野の寓居宛。

勘助様 貴方の随筆集を読み終って何とも名状すべからざる無量の感慨に浸ひたっています。嗚呼懐かしの小日向台こびなただい 六十有余年昔の今もなお時々夢にさえ忘れ得ぬあの水道町のおやしき 築山のほとり 青桐のすがすがしかった木蔭 お二階の兄君のお書齋 下のお姉様方のお部屋 一つとしてなつかし参らぬ処はな

く 姉上様のお琴に合わせて兄上様の月琴のしらべ 種々の思いはそれからそれと馳せて止まる処を知りません。あの頃は御両親様も御健在で皆様お揃い遊ばされこの上なく御幸福のお家庭で——著者。節子さんは知らなかったのだ。私に関するかぎり時によって緩急こそあれ真に幸福な家庭などはなかった。——数ならぬ私も時々はそのお仲間に加えて頂きお母様に可愛がって頂きました事は一生の想出として深く心に銘じています。お蔭様で故郷遠く離れて一人都にありし身も旅愁も覚えぬ業を終えられました。その頃貴方に「西

川さんの眉は三日月さんみたい」といわれました私の眉も今はすっかり白眉はくびとなり昔の面影は露ほども残っていません。初子姉上様おかくれになりましたから一度赤坂のお宅にお伺いしまして御母様やお兄様や末子おねえ様にお目にかかりましたが私も各地に転々として皆様の御消息もつい知らず知らずのうちに御疎遠になりました。いつぞやも申上ましたようにあなたの御著書を心がけていたのですが不幸にして見当りませず両三日前宮津中学校三年生になった孫（私の長女×子の長女）△△子が学校の図書館で見出し借りて帰って

くれましたので吸込まれる思いで精読させて頂きました。よみゆくままに過ぎし日の事ども次々と思ひ浮びて果しもなく本当に本当にただもうおなつかしく拝見しました。屋^や寿^す子^こ様御臨終の御模様など目の前に見る心地がしまして幾度本を閉じた事でしよう。あのお可愛らしかった屋寿子様はるかに御冥福をお祈り申上げます。貴方も六人の御^ご同^き胞^{よう}今^{だい}はお一人になりましたね。私も姉にも弟にも早く別れまして私一人生き残っております。長らえて別に望みもなく役に立たぬ身ながらまだ何かこの世に用事が残っているかもしれませ

んと貴方の仰せの通り悔なき余生を送りたいとそれのみ念じています。御地在住の次女▽子から母の日の贈物として貴方の御著「くいな笛」とかを送ってくださいます。すそうですからまた近く貴方に御目にかかられると思つて楽しんで待つております。本年元旦に

老の坂のぼりてみれば何もなし八十年はただ夢の夢と口ずさみました。お笑い下さいまし。私も筆が立てば書き残したい事は沢山ございますが不幸にしてその

才なく誠に残念のかぎりで御座います。何卒不順の季候御二方様ともくれぐれ御自愛遊あそばして下さいませ。

御病後も定めしすっかり御回復の御事と存じ上げます。私は年の故かいつまでも全快致しませず歩行困難で困っております。頭も大分ぼんやり致し目もうとくになりましたして手紙もろくろく書けませずこんな乱れがちになります。何卒御判読下さいませ。お懐しさのあまり筆はとりましたものの意あまって言葉足らず書余は御推察のほど御願ひ申上ます。かしこ

昭和三十二年五月十一日

勘助様 御前に

奥様にくれぐれもおよろしく御伝えのほどお願い申
上げます。

字の上手な人だったがこの手紙の字はいくらか衰えを
見せている。しかしこんな長い便りを書くほどの気力は
まだあるのだ。

封筒の表に私の手で 創元文庫 飛鳥ひちよう、岩波文庫 銀
の匙、新潮文庫 中勘助集、角川文庫 母の死 を送

る 五月十四日 と覚えがしてある。手もとにあった著書を送ったのだらう。

三十二年五月十九日附節子さんの手紙。東京中野の寓居宛。

昨日はお懐しいお手紙あり難く拝見致しました。前年奥様からの御手紙であなたの御病気の事も伺っておりましたし御退院の事も承知しておりましたがその後心にかけてながら自分の身にかまけて遂々御無沙汰に打

過ぎました。御手紙によれば今に起居御不自由お外出もお出来になりません由さぞもどかしく思される事とお察し申上ます。私も二十八年の九月以来同じ状態でお外出なぞまだまだ思いもよりません。ただ室内の歩行がようようの思いで御座います。お互様に家康ではありませんが年はとりたくなきものぞとも感じられて残念に存じます。しかしあなたはお机に向われてはまだ現役でいらっしやいますので何よりと存じ上げます。私は昨年来非常に目が悪くなりましたので何も出来ず午前中は新聞を読んでお昼になり午後（この頃）はあ

あなたの御本を読んで日を暮しその間来客とお話をする程度で夜は目のために読書も習字もせずただラジオだけを楽しんでおります。さて御礼が後になりました御免下さい。昨夕御恵贈の小包たしかに拝受致しました。お礼状は後にして先ずおなつかしい御母上様にお目にかかりたく日没まで一息に読ませて頂きました。またしても万感胸に迫りて何ともいえません。お健かだつた頃の御面影目に浮びて涙に目を沾ぬらしました。……お母様は本当におやさしい好いお方でしたわね。

貴重な御著書沢山にお送り下さいましてあり難うご

ございました。前述のように一日のうち数時間ずつでございますから中々読み尽す事は出来ませんので毎日永く楽しんでよませて頂きます。御一別以来のあなたの御様子もよくわからせて頂き嬉しく存じます。ならば今一度お目にかかって種々お話申上げたいと存じますがあるいはこの地上では御再会はむつかしいかなど半ばあきらめております。あなたは私よりはお年もまだお若い事ですししっかり御養生なすって早く御全快なすって下さいませ。種々回顧致しておりますうちにいつしかまた思いは遠い学生時代に帰ります。ある年のお

正月お宅でかるた会をお催しの時私もお仲間に入れて頂きましたが兄上様の一高のお友達ぼか斗り六、七人様だったと思います。その内のお一人□□様（たしかそうだと思っと思っていますが）に呉くれで同じ海軍士官のお宅のかるた会の節本当に偶然に思いもよらずお目に懸り一対一で雌雄を決した事がございましてお互に驚きました。その後も呉御在任中は時々御目に懸り奥様もお心安く願っておりましたが御転任後は御消息も知らず今なお当時の奇遇を偲びふしぎのようにも思われます。その後幾年ぶり佐世保でゆくりなく栄子様にお目に懸

りまして嬉しく存じましたが今はその栄子様も最早幽
明^{ところ}処を異にしてまた逢うよしもありません。人生は
測り知られぬものをつくづく存じます。あなたの御著
書によって種々教えられています。あなたも早く御全
快なすって一度橋立へも御来遊下さいませ。この頃は
橋立も昔とちがいが大分俗化しまして御期待にはそわな
いかも知れませんが天然の白砂青松だけは昔ながらの
景を残しています。

奥様もどうぞ御一緒におこし下さいませ。お待ち申
しております。

では一筆御礼かたがたまた老の繰言くりごと申上ます。

返すがえすも御身御大切に遊しますよう御祈り申上
ます。かしこ

五月十九日

この頃は字もよく忘れますし前後次第もない筆のあ
とどうぞ御判読下さいませ。

黒川節子

中勘助様

御奥様

くいな笛は今旧友の処を讀んでいます。先便申上ま

したのは小堀杏奴こぼりあんぬさん選の中勘助集でございました。
今全集で御多忙のよし御自愛下さいませ。

兄のカルタ会にきたお友達はみんなおぼえている。そのなかにこの手紙に出てくる□□さんという人があって後に海軍の軍医になられた。節子さんもそういう遊びが好きで巧かった。呉での奇遇はずっと後、二人とも私の家とは音信が絶えてからの事だろう。節子さんの夫君も海軍士官だった。

宛。
三十二年六月二日附節子さんの手紙。東京中野の寓居

新樹の蔭もなつかしい頃ですのにことしはいつまでも暑かったり寒かったりちつとも気候が定まりませんで困りますね。その後御二方様にはお変りなくいらせられます御事と存上ます。おかげさまで私も少しずつ快方に向いまして漸よゆうよう数日前からこたつを離れましたがまだ床を離れきる事が出来ませんで困っております。年をとりますところも意気地がなくなるものかと

吾ながら愛憎あいそもつき果てます。

先達せんだつてお送り頂きました御本ならび并に▽子が贈つてくれしました「くいな笛」日夜楽しく拝見致しております。あなたの御様子が御誌上に躍如として拝察せられまして一しおおなつかしく繰返し繰返し拝見しております。眼が悪くなりましたため中々急には読み尽せません。今後とも長くかかりまして拝見しようと思っております。重ねて御厚礼申上ます。

銀の匙の御姉上様のお友達とございますのはもしましや私の事を書いて下さったのではないかと自惚れまして

△△子に左様申しました処「ワーツ」と大笑いして「お祖母ばあちやまそのお声で」と冷かされました。これでも若い時はちつとは声もよかったのよ　と自慢したのですがそれほど私は今は声も出ませんで我ながら不思議に思われます。あなたも耳が遠くおなり遊ばしました由それではこの頃の私のこえなぞお話してもおわかりにならないでしょう。誠に年はとりたくなきものとおつづく感じます。

さてこちらからも何かお目にかきたいと存じますが宮津と申もうします処は名産は天の橋立ばかりで別に産物

もなく誠につまらぬ処でございます。別便御送り申上げました「わかめ」は本庄村と申す漁村でとれましたもので御目にかけるほどの品でもなく失礼とも存じましたが少し斗ばかり御送り致します。

本庄と申す処は宮津市から六、七里離れた海続きの処でございまして昔咄の浦島太郎の出生地といわれている処でございます。この辺の海では本庄が一番わかめのいい処とされています。一寸火取ひどって細末にし御飯にふりかけて召上って頂くのがよろしゅう御座います。とても御口には合いませんでしょうがただ心の香

だけを御笑味下さいませ。

浦島のよわいをそえて本庄のわかめを君にさし上
るなり

丹後の海岸には名所旧蹟も沢山ございますから早く
よくおなりになって一度ゆっくりおこし下さる事が出
来ましたらどんなに嬉しい事でしょう。むさくるしい
宅ではございますが幾日でもお宿はさせて頂きます。
どうぞ御養生遊して一日もお早く御全快なされます様

御祈り申上げます。まだ字もよく書けません。お読みにくかった事と存じます。おゆるし下さいませ。×子も宜しく申ますよう申出ました。かしこ

昭和三十二年六月二日

黒川節子

中勘助様

御奥様 御前に

花たちばなそれにはあらで与謝の海のかめの香
にぞしのばるる君

粟穂

三十二年六月十九日附×××子さんの手紙。

昨日は御本をお送り下さいましてまことに有りがとうございました。御本の中のおじ様のお写真おなつかしく拝見させていただきました。やはりどこか□□のおば様にお似ましの所がおありだと私が申しましたら御兄妹皆様おきれいでいらしたなどすぎし日の事ども思い起しこうしてお便り頂きましたり御本を御自ら沢山お送り下さいます事をどんなに母がよろこんでおりましよう。この一、二ヶ月足の痛みになやんでおりま

したが四、五日殊に気分も重いらしく私から御礼申上るようにと申しましたので失礼でございませが一筆さし上げます。きのうから早速私が読んで聞かせて上げておりますが私も一日のうちで一ばんの楽しみでございませ。全集の月報で辰野先生や安倍先生や杏奴様のおかきになりましたのを拝見しておじ様のことをいろいろ伺うことが出来まして大変うれしく思いました。

大手術をお受けになりましたおからだくれぐれも御大切にいい遊ばして下さいませよう皆様の御健康とあわせてお祈り申上げませ。かしこ

六月十九日

×子

中勘助様 御前に

これは筑摩書房の中勘助内田百閒集を贈ったのに対する御礼状である。写真も比較的新しいのがついてるし詩歌が纏まって載ってるからそれが見せたかったのだ。

節子さんとは手紙はもとより年賀のはがきも出した記憶がない、平塚海岸に住んでた時たった一度全くの俗用で手紙のやりとりをしたほかには。それが数年前私の入院中節子さんから年賀状か見舞状かきて家内がそれに返

事を書いたであろう、どこへもそうしてたから。私は文案を口授することもできない状態にあった。退院後——二度めの退院だ——たしか随分日がたってから私はやつと自分でほうぼうへ挨拶状を書くようになった。それから初めて節子さんと手紙のやりとりが始まった。私は七十、節子さんは八十ちかく、最初に会った時から六十年になる。著書の贈呈もした。節子さんの手紙に私の著書が入りにくいとあったからでもあるが、一つには病後の疲れきった体では到底書ききれない長い月日の自分と周囲の消息を知らせたいと思ったからでもある。

車が動きだすと間もなく丹波口という駅でとまる。何
度も通る処なのに今初めてその丹波のほうへ行くとな
ると脚絆きやはんわらじで荷物を振分けにし、見送りの人たちに別
れを惜んでゆく古い旅姿の自分を目に浮べる。それほど
私には丹波は未知の国であり、怖い伝説の国であり、山
また山の辺陬へんすうである、それから先の丹後の宮津は 縞しまの
財布がからになる と唄できくけれども。雨は本降りに
なった。数年前人に誘われて保津川下りをした時たまた
ま嵐峽らんききょうの崖の中腹を玩具のような汽車が煤煙を吐きな

がらのろのろトンネルへはいつてゆくのをなにか珍しく面白いものを見つけた気持で あれに乗ってみたい なぞいったものだったが、今はからずそれに乗ってみると舟から見上るのとはちがい山峡は狭く陰気で、時どき見おろす川は雨水に濁り、単線とみえて待避線で待合わすのがもどかしくてならない。案内知った人たちはその暇に車をおりて一握りの平地にある水栓の水で弁当箱を洗ったり、蓋にうけて飲んだりしている。京都から宮津まで三時間半、しかも初めての線にもかかわらず天候の陰影と自然の平凡が倦怠をおぼえさせ始めた時に亀山へつ

いた。

雨は終にあがらなかつた。倦怠がギリギリまできたじぶん入江のような川口のような広びろとした処へ出た。いい気持だね。私は家内にいった。若狭湾の一部なのかもしれない。宮津へ着いた。知らぬ土地とはいえ待ち望んでる人のところへ行く安心と喜びがある。で、ゆっくり落着いて改札口を出た。小雨がふっている。見廻してもタクシーがない。遠いかもしれないのに雨の中では、と思うところへ客をのせてきたタクシーがとまったのでこれ幸さいわいと入代りにのる。鶴賀という処だが、と苗

字をいったがわからず、ちよつと走つてとある町中の家
できいた。よく知つてる様子で親仁おやしさんが笑いながら手
を使って運転手さんに場所を教え、私たちのほうへ向い
て 黒川□さん？ といった。御主人は亡くなったので
節子さんといったら ああ 節子さん とそれも知つて
るように合点してもう一度運転手さんに路を教えた。私
がもときいてた郊外？ の家から市中へ移られたのだつ
た。道路すれすれに水の流れる川のふちの商店街から引
込んだ住宅街の、手紙にあつたとおり「高塀のある」門
構えの家だった。その門前で車が止ると同時に向うから

きた婦人が車をおりる私たちに小腰を屈めてかがにこやかに言葉をかけた。×子さんだった。使に出てちようど帰ってきたところとのこと。一向お知らせがないので……といわれ手短かに歯の治療のこと、治療がすんだその場からきたので予報の暇がなかったことをいってお詫びする。私たちは内玄関——とでもいうかはいると奥深い土間になる関西風の入口——へ案内された。そうして上りはなに立った時に間の襖たつがあけ放しになって見通せる茶の間らしい部屋で炬燵こたつにあたってた節子さん——それはすぐわかった。——が大きな目でこちらを見るや

顔がキツと引締ってやおら立ち上った。特長のある長おもての目の大きい、そこにのみ昔の面影の残ってる節子さんだ。はるばる訪ねてきて幾十年ぶりに見るあの潑刺はっらっとした節子さんのこの形骸！「……私の眉も今はすっかり白眉となり昔の面影は露ほども残っていません……」と手紙にもあった。私とても同じことなのだけけれど。私はお互に命拾いをして思いもかけず逢うことのできた喜びよりもいいしらぬ淋しさ、佗わびしさのさつと胸に湧き起るのをおぼえた。節子さんは足の運びも力なく出てきた。私は何より先にまた来ることの遅れたのと予報

をしなかったことと言訳をした。それから茶の間を左に見て座敷へ通され、改めて一別以来の挨拶と初対面の家内の紹介をすませた。節子さんは出ていった。が、私たちが床の花を見たり、ちがいの棚の置物を見たり、手持無沙汰にしてるところへまた出てきて　こちらへ　と茶の間へ案内された。うち寛くわんいでというのだろう、腰かけ式の炬燵が出来ている。次の間にちゃんと綺麗な床がのべてあるのがちらりと見えたが、節子さんは不断この炬燵で読書をしたりラジオをきいたりして、疲れると床にはいって休むのだろう。病後であり目も悪いというのに

手紙にあった一日の時間割は八十の年寄と思えないほど詰まっていた。炬燵を間に互に遠い思い出を語ろうとするが感慨ばかりが先に立ってすらすらは出てこない。

第三者の家内がいるせいもあるかして吃音みたいにときれる隙ひまにほかの話が挟まってはまたもとへかえると

いうあんばいにたどたどしく進んでゆく。その思い出の

芋環おだまきが滑なめらかにほぐれるようにとか節子さんは若い頃の

写真を沢山出してきた。見おぼえのあるのも幾枚がある。

昔姉が貰って持ってたのだ。明治二十六年十七ぐらいで女学校へはいりたてのものもある。これらこそ歳月に蝕ばま

れぬありし日の姿である。が、はっきり私の記憶に残っているのは二十七、八年の日清戦争。私が十の時からだ。いっしょに軍歌をうたったから間違いない。西川さん——これが消しがたい印象を残した初めの苗字である——は豊かな髪をなんといいのか当時の型の束髪にし、三日月の眉の下にパツチリした綺麗な目、特長のある面長な顔に心もちうけ口をもっていた。私の姉が髪がよかった話をしたら節子さんは自分も立つと踏むくらい長かったという。女にしては背の高いほうなのに。断髪なぞある時代ではなし髪は長いほどよかったのだ。ある時学

校の活人画——今みたい芝居などはやらせない。ただ華族女学校と明治女学校に活人画というものがあつてなにかの祝日などに余興に見せた。人間が人形の代りをするようなものである——にその髪をさげて清少納言になつた。簾すだれをあげて香炉峰こうろほうの雪を見る型だ。髪は本物よりもよかつただらう。その姿で家へ帰つたとかいうそのじぶんとしては勇敢な話もきいたような気がする。

節子さんと私の姉たちが親しくなつた事の起りには少し滑稽味を帯びたところがある。三人は明治女学校というキリスト教の学校での三人の不信者だつた。節子さん

のはどういふ事情だったか知らない。姉たちのは父が学校の性質を知らずに入学させてしまい時期を失して転校もさせられないという悲喜劇だった。で、キリスト教関係の課目や式の時には仲間はずれになっていなければならぬ。それが最初の機縁となったらしい。それに節子さんが女らしいやさしさをたっぷりもっていながら一方男性的で、活潑で、明朗豁達だったのにひきかえ姉たちは私の家の古い教育方針から極端に消極的で、控えめで、万事事なかれ主義だったのがかえって双方を結びつかせる契機となったかとも想像される。

節子さんの寓居は江戸川の大曲おおまがりに近いへんにあつて
ちようど小日向台の私の家から麴町の学校へ通う道筋に
あたるので姉たちは毎朝往きがけに誘つていった。電車
なぞない頃で雨の日雪の日には合羽に高下駄、蛇の目を
さしてゆくのだつた。その寓居とは何かの「つて」があ
つたのだらうけれど心おきなくいられる家ではなかつた
様子でぽつと出の節子さん——節子さんの生家は山陰道
かのどこかの藩士で、そのせいか武家の娘といった気質
がかなりあつたように思う。そして当時としては珍しい
薙なぎ刀なたを習つていた。——はさすがに淋しく頼りなくて私

の家へくるのが唯一のこよない慰めだったらしい。この事は近頃もらった手紙にもあつたし、現にこの炉辺の話にもくり返し語られた。よほど身にしみたとみえる。姉たちは卒業するまでにはどれだけ誘いにいったかわからないのに——たぶん直接の知合でないとの理由で——その家へ一度も上ったことがなかったとこれは今度初めてきいた。そんな躑しつけであり、それでも通る時世だった。そうした気持ちで節子さんが遊びにきたとはいうもの、これも時世でほんのたまさか、数えるほどのことだったろう。兄が二階へ移って後姉たちの自修室になった玄関

脇から袖のように庭へつき出た六畳、築山にのぞんだ肱ひじかけ窓があつて百日紅さるすべりの梢こずえをもる月が涼しくさしこむ部屋、五位、がりがね、姉たちが嫁いでからは私の、それから妹たちの、あによめ嫂あによめのものとなつた思い出の多い部屋、そこへその思い出の忘れがたい一つをつくるとも知らず節子さんは通される。私は年もちがうし、前もつて「黙つておとなしく坐つてる」という厳しい約束のもとに姉たちから同坐を許されてるのだからお喋りの仲間にはいる訳ではなく、ただそばに坐つて時たま一言二言なにか言葉をかけてもらうぐらいのことだった。が、それがと

ても嬉しかった。兄の根強い妬^{ねた}みのために私は家の者から白じらしく冷く扱われ、殊に両親からは厳格らしくされたので——私は時どき「なぜ自分を可愛がってくれない」というような訴えをして母や伯母さんに涙を拭わせた。——子供心に無意識に、とはいえ本能的にうち消しようにもなく人のやさしさに渴していた。そして溺れる者のごとく手をのばして人のやさしさに縋^{すが}ろうとした。もしその時その「優しさ」の餌をもって私を誘惑する者があつたら私は訳なく罨にかかつてしまったであろう。で、節子さんに対してもただの姉の学校友達、お客さんとい

うのではなく、前述の気持を胸のうち一杯にして接して
るのであった、もとよりそんなことを口に出しもせず、
出すほどはつきり意識もせず。したからとて口に出す勇
気をもたないはにかみ屋だったけれども。その節子さん
はいよいよ卒業して国へ帰った。節子さんはいつてしま
った。姉のいないとき私はひそかに姉の抽斗ひきだしをあけそこ
に入れてある写真を見て目に一杯涙をためるのであつ
た。胸も一杯である。——その写真に六十何年ぶりで今
度めぐりあった。——家の者の手前なにか悪い事でもす
るようにひた隠しにかくしてたし家の者も見えて見ぬふり

をしてたのだろう。その後あまり月日のたたないうちに節子さんが小石川の家へきた記憶がある。美しい若奥さんになって、遠来の珍客として自修室ではなく座敷へ通された。節子さんは軍人が好きだったが望みどおり海軍士官のところへ嫁いだ。姉たちがいなかったような気がする。それが片付いた後だったのなら私は中学生だったはずだ。が、たぶんものもいえなかっただろう。それから歳月の流が記憶を洗い去って節子さんの名は姉たちの口のはにもものぼらなくなった。

ところがいわゆる縁が切れなかったとでもいうものか

十数年後子供のない上の姉の家に養子の問題が起った時に白羽の矢は節子さんのところに立って結局話が纏まった。めでたい友情の復活である。節子さんは四つか五つの男の子をつれて上京し、十日ばかりか青山南町の姉の家滞在した。偶然にも私が病気のため除隊されてそこに厄介になった時である。節子さんは三十四、五だったろう。産後のせいかやつれてたにもかかわらずとても元気で、快活で、「昔」が蘇った晚餐の卓子のまわりに私たちは若やぎ、笑い、さざめき、はしやいだ。懐旧談につづく懐旧談。そのあいだに節子さんが私についてい

った一言ふた言がいまだにはつきり記憶に残っている。

「あのじぶん□□さんおとなしいから好きだった」それは昔の私である。「□□さんすこし色が白すぎるわね」これはその時の私である。白すぎるところか蒼かったのだ。それから転地した野尻ではまっ蒼だといわれた。それは実に思いがけない、思い出多い、涙ぐましいほど感慨の深いまどいだった、その昔の因習的な道德、行儀作法、家族的地位、年齢、性別等によって押しつけられ、縛りつけられ。封じ込められてたもろもろの感情がここに解放されて一時に堰を切って奔出したかのような。

短い滞在の日が過ぎ節子さんは子供をおいてこの宮津へ、私は野尻の島へ。またもや音信不通。震災の時から私は上の姉の家と絶交したのでさぞかし中傷があるだろうと思っていた。爾来数十年、そのあいだに私の家庭争議の相手だった親兄弟親戚たちは皆亡くなった。そうして夢想もしなかった節子さんからの最近の音信によりかつての中傷誤解もとけ改めての再会を節子さんは望んでるように推測された。そこでこの再会となった。が、今度の再会はあまりにも淋しかった。私は七十四歳、生死の境をさまよった重病の後である。節子さんも八十をこ

して同様に重病の後、しかもまだ全治しきらないらしい。かつては若い頃の思い出を語り合えばすくなくとも胸の裡にはそれが如実に再現される喜びがあった。ところが今は二人とも肉体的容姿的にそうであるようにもはやいかなる意味、いかなる程度においても過去は見出されず、また蘇らない。それはどうにも手のとどかぬ遠い遠い処にある。二人ともそれをかすかに眺めやりながらはななくも懐しみあこがれて語りあっている。そこから救いがたい憂愁が湧いてくるのであった。

いくととせ帳とぼりをここにあげまきの昔を今になすよ
しもがな

節子さんがちよつと夕飯の指図かなにかに台所のほうへ立った間に私たちは炬燵ごしに小声に相談して町の見物に出ることにした。見たい訳ではないけれど休みなしの長話があとで節子さんの体に障ってはと懸念したからだ。私たちは出た。あてもなく門前の川についていってそれとは直角に港へ流れ込む川の岸へ出た。何羽かの海猫が狭い川筋を上下してあさってるのを家内はれいの子

供らしい興奮を見せて眺めている。鳴いてるといふがきこえない。海岸へ出た。遠すぎもせず近すぎもしないあたりには橋立がすこし雨に煙って横わっている。初めて見る橋立は珍しくもあり気持がよかった。雨天のせいかわ内に舟の影もなく静かなのがなによりである。綺麗にぬられた楼造りの遊覧船が数町はなれた船着き場に美しい水鳥みたいにもやっている。細長い本州のこちら側には栄えた港が少いし、殊にこの辺ではここに及ぶものはないであろう。あの民謡は誰が歌いだしたか知らないが近郷近在から野こえ山こえ、または海岸の石ころづたい

にこの伝説の国めいた可愛らしい港町へきて遊んだら縞の財布がからになったでもあろう。おりおり蝙蝠傘こうもりがさをつぼめるぐらいの霧雨のなかに佇んで暫く眺めを楽しんだあげくまだあまり時がたたなくて節子さんの休養にもならないと思いき向きをかえて町のほうへゆく。相当な商店が並んでるけれど珍しい物も昔を偲ばせる物もない。疲れて興奮性の飲み物がほしくなったし、もう少し暇をつぶすためにとある大きな店でカフェーを尋ねた。店の人は喫茶だけの家はちよつと思案の末この道をまっすぐ行って左へ曲って少しゆくと右側に一軒あります

から と教えた。礼をいってそのとおりにゆく。人のいない銀座裏という趣の狭い通だ。あつた。はいつたら薄暗いけれどきちんと整頓された店に一人の客もない。静かでもいいとはいふものの寒さむとした感じだ。と見ると 又ード・スタジオ と片隅に書いてある。ギョツとしたがさりげなくはじっここの席につく。ウエートレスが出てきた。私はコーヒー。家内は紅茶を注文する。主人かとみえる五十恰好のちゃんとした服装をしたのが現れて落着いていれはじめた。見たところ頼もしげだ。ウエートレスがレコードをかけた。大衆向ジャンジャラかと思つた

ら頗^{すこぶ}る本格の音楽だった。いささか狐につままれたかたちで神妙にきいてるところへ茶とコーヒーがきた。紅茶は知らない。コーヒーはなかなか結構で東京のいいかげんなのよりいい。腕におぼえかもしれない。帰って話したらその辺はもと遊廓のあった処とのこと。バーも何軒かあったようだ。夜は賑うのかもしれない。風呂の支度ができていた。

入浴後茶の間の同じ席で晚餐。名物の蟹、鯛の煮付、山椒^{さんしょう}の佃煮、山椒味噌、いさざの酢のものなど。節子さんはいさざ——魷^{ほせ}——がこのへんの特産で、そのぬめ

っこいのを嫌う人もある　という。私には結構だ。蟹も結構、山椒味噌も結構。偶然私好みのものが揃ったが酒は歯の治療直後ゆえ辞退。食事中も食後も思い出話は尽きない。そのあいだに家内が数年前最初の旅行のときある人のお誘いで保津川下りをしたことをいいだしたら節子さんは言葉をはさんで　それは誰それという方ではありませんか　といった。そこで三方とも各おのおの夢にも知らなかつたまるで因縁話にこしらえたみたいなお互の不思議な結びつきが初めてわかった。話は絶えなかつたけれど思いなしがそれはいつとなくなるとなく湿ってくる。

節子さんはしんみりとして 失礼ですがあなたを弟のよ
うに思います といった。これが小石川のあの部屋で、
あの時に、あの子にいわれたならば！

五十年老いてあへる日たまゆらのむかしがたりは佗わび
しがりけり

九日

この朝だったか節子さんは細ごまと書かれた家に関する記録を出してきて見せた。いちいちゆっくり読んでる暇がなかったがどうかという時の陣形かなにかを描いた

ものもあつた。青山の姉の家でその頃はまだ健在だつた。こちらのお年寄の床几しよづきに腰かけた甲冑姿の写真を見た記憶もかすかにある。この藩の立派ないわゆる鎗やり一筋の家柄とみえる。その記録のなかに節子さんの夫君が日露戦争の末期に乗っていられた哨戒船信濃丸が感状を受けたというめでたい報告の手紙もあつた。古い事で自信はないが記憶に誤りがないとすればこれはバルチック艦隊が対馬海峡へきたとき大胆不敵に執拗な接触をつづけ当時甚だ幼稚だつた無電で敵状を詳細本隊に報告したというちなまぐ血腥ささのない武勇談で、ロシアの士官の書いた戦記に

も載っていた。そのじぶんはまだ五つ六つの子供だった家内に私は　これは大変な事なのだよ　と行ってきかせる。節子さんは嬉しそうにした。

お別れとあつて今日は炬燵のあいた一辺に坐り仲間入りをした×子さんはお母さんの胸のうちを察して橋立の見物をやめてほしい口ぶり、私どもも同じ思いゆえそれはこの次のことにして話しつづける。もう一日　と口ぐちにひきとめられるけれど、こちらも山やまながら東京の家の都合が許さず、京都での招待その他もあり、後ろ髪をひかれる思いで午後たつことにきめる。家内は炉辺

で節子さんの写真をとる。それがはからず悲しい記念となった。時は無慈悲に刹那せつなもとどまらず過ぎてゆく。

午後。私たちがきのうそこに迎えられた玄関の土間へおりて最後の——本当に最後になった——挨拶をした時に節子さんは上り端あがに坐はなって力なく、しかしはつきり 淋しゅうございます といった。真情をこめた言葉だった。私は上体を屈かがめて節子さんのほうへ顔を近づけながら またお目にかかりましょう といった。これも真情だった。私たちはそのようにして別れた。

帰京後私はどんな礼状を出したかおぼえていない。た

だ 京都へ越されたら下駄にお灸をすえられるほどお邪魔をする と書いたのに対して節子さんは この秋は——とあった。それまでには京都へ引移るつもりであり、私の旅行の予定は来春だということをおぼえていたのか、ひよっとするとおぼえていながらこの秋を望んだのだらう。

——^{ほうき}箒を立てるまでゆっくり来てほしい と書いてあった。そしてその後二日？ たって訃報がきた。私たちの長い交渉——というよりはむしろその中断の一生だったが——は突然に切れた。節子さんは八十一歳で亡くなった。幸福な結婚をして五男二女の子福者であった。

雁^{かり}がねの別れをいとどうの花のさくをもまたで逝き
し君はも

今日けふと君待たすらんかの岸にわたりぞゆかん天
の橋立

昭和三十四年五月四日附×××子さんの手紙。東京中
野の寓居宛。

この間は母の写真を有難うございました。永年の念願が叶い御二方様にお目にかかることが出来ましたので亡くなります十日前と申しますのにあんなにうれしそうな顔をして写して頂いております。

お目にかかれてどんなによろこびましたかしれません。もうこの世に思い残すことがないという言葉の通り世を去りました。

こんな田舎まで本当によくいらして下さいまして有りがとうございます。厚く厚く御礼申し上げます。

十六日から□□の叔母がまいりまして十六十七とふ

た晩おそくまで語り合い十八日の夕刻叔母が帰洛致しましたあと八時半頃急に苦しそうにして横になりました。たきり二日間つめたいお茶とカルピス位で二十一日午前一時十五分遂に帰らぬ旅路につきました。

この前にも再三死にかけた事がございましたがその度に心臓が丈夫でもち直してくれましたので今度もきつとよくなると思っておりますのに兄妹たちに三度も電話で連絡をしながら最後に意外に早かったものでございますからとうとう誰も間に合いません。△△子と二人でさびしく見送りました。母にも兄弟たちにもその

事を申しわけなく思っております。もう今日は二七日でございます。すぐにお返事をと存じながら訪ねて下さいます方々に母がお相手をしてくれませんのでついつい延引いたしてしまいました。おゆるし下さいませ。

御親切に甘えて恐縮でございますがあの写真のフィルムを拝借出来ましたらこちらで焼増しして兄弟たちに頂かせたいと存じますのでおねがい申上げます。今日はまるで夏のように二十七、八度にも水銀が上っておりますが季候が不順でございますからくれぐれもおいとい遊ばして下さいませ。ではまた

五月四日夜

×××子

中御二方様

追記。今は自分の記憶もはっきりしないがはじめ久かたぶりにもらった節子さんの手紙には何かの手伝いをして足を怪我したというような書きかたがしてあったので私は日がたてばなおる傷ぐらいに考えてただろう。それが実は非常に危険な性質の腫物だったことが近頃になって知れた。それだからこそ私の訪問を待つのにあれほどの焦燥を示し、また×子さんともどもしきりにもう一日

の滞在を望み、いよいよの別れぎわには緊張した面もちで淋しゅうございます　ときっぱりいったのではなかつたらうか、ひよつとするとこれが最後という予感もあつて。私は一両日後に迫つた帰京の前に他の約束を変更する余裕がなく心ないしかたをする結果になつたのだが、もし節子さんの病氣の実状がわかつたらどんな無理をしてでも予定をかえたらうものをと悔いてもかえらぬことを思うのである。

昭和三十八年八月十二日

日本文学電子図書館

天の橋立

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「中勘助随筆集」
岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行



日本文学電子図書館